印度雑記帳

伊勢　司

日本代表!? FCキッカーズ（中編）

さて、前回は僕が所属する草サッカーチームで企画したマニプール遠征、その前編をお届けしました。今回はその中編となります。もう少々お付き合い下さいませ。

長年、入域制限が敷かれていたインド北東部のマニプール州。その入域制限がようやく解除されたこともあり、週末サッカー旅行を企画した我らが「FCキッカーズ」。軽い気持ちで始まったはずの旅行。それがまさか州政府の全面協力によるものになるとは思いもしませんでした。

街の各所に貼られた試合宣伝広告

州都、インパール空港に到着したFCキッカーズ、そしてそれを取り囲む地元テレビ局に新聞取材陣の面々。半信半疑のままインパールの地に降り立ったメンバーは見事なまでに浮き足立つこととなりました。そして空港からホテルまでの道のりでは、いくつもの巨大広告が貼られ、試合の宣伝が大々的に行われています。

前回の話になりますが、ここで話を最初に戻すと、僕たちはデリーを中心に活動する草サッカーチームであり、マニプール州には観光目的で訪問する「つ・い・で」として、地元のサッカーチームと親善試合をしようと考えていました。しかし今では、三十五年振りの親善試合、それもわざわざ日本から来た遠征チーム（これは知らぬ間にマニプール政府側に捏造された情報ですが）とは一体どのようなチームなのか、一目見ようとホテルにまでできた人だかり、そして翌日にはマニプール州自慢の血気盛んなU−21歳代表と戦うこととなっているのです。

試合のことはひとまず忘れ、インパール作戦の戦没者慰霊や指導者チャンドラ・ボーズの博物館などを訪れました。ひとたび旅行者目線になると、マニプールは日本人にとってとても親和性の高い場所です。すぐ隣はミャンマーであり、人々の容姿はインド人というよりも東南アジア系のモンゴロイドが多数を占めます。食文化もお米を中心としており、見た目も味も梅干しそっくりなものなどが食されています。このように僕たちは束の間の観光を楽しみました。

ホテルに戻ると前夜祭と称しての歓迎パーティーです。パーティーには政府関係者をはじめ市長や翌日の対戦相手の選手もいます。始めはマニプールの伝統料理（基本的にかなり辛い）がビュッフェ形式で振る舞われ、その後は円筒形のスカートが特徴的な伝統舞踊であり、またインド四大舞踊の一つでもある「マニプーリー」が披露されます。時間も経ち会場の空気が程よく和んだところで、パーティーの締めに日印歌合戦が行われ、翌日の試合を前に、歌と地酒で絆を深め合うこととなりました。

試合当日の朝、朝食時に地元の新聞を開くと、僕たち遠征チームのマニプール到着、そして試合のことが写真と共に大きく記事になっていました。マニプール州政府が威信をかけて行う催事となってしまった今回の週末プチ旅行。その波にまんまと飲み込まれ、朝から妙な緊張感に包まれるFCキッカーズ。

キックオフは午後一時三十分、僕たちは三時間ほど前に現地入りし、試合の準備を行います。試合はインパールで最も大きなクマン・ランパック総合運動場、調べてみると収容人数はなんと二万五千人とのことで、試合のチケットは50ルピー、さらにVIP席なるものは一席500ルピーもしています。ちなみに50ルピーあれば映画館で映画を観ることができ、500ルピーは平均日給以上にもなります。草サッカーチームの親善試合など、普通は入場無料でも人が集まらない上、日曜の昼間に50ルピーも払って誰が観に来るものかと、メンバーは皆安心していました。しかし試合前のウォーミングアップも終わり、試合開始まで残り三十分を切ったころ、ふと観客席を見るとそこには衝撃の光景がありました！

（次号につづく）

前夜祭でのマニプーリーダンスの一幕

いせ・つかさ　1988年生まれ。同志社大学商学部卒。バラナシ・ヒンドゥ大学 観光経営学科 修士課程修了。インド政府公認 旅行業務取扱管理者 及び 日本にて総合旅行業務取扱管理者。「日本とインド、人をつなぐ」をモットーとした株式会社ジャパンディアを設立し代表を務める。旅行事業を中心に、インドに関する各々の希望や相談一つひとつに丹念に応じている。